

令和8年10月



スクールカウンセラー 中野隆治



「涙が出るほどわかる」



最近、こんな詩に出会いました。少し長いですが、紹介します。

あんたが 見つめているものは あんまり高いので

わたしは 見つめることができない。

あんたが 思いつめていることを

思いあてることは とてもできない。

けれど

あの遠い世界と だまって ただ向かい合って立っている

あんたの姿は あんまり自然なので ^{わか}よく判る。

涙が出るほど わかる。

あまのただし
(天野 忠『きりん』)

同情と共感という言葉があります。よく似ているようですが、その意味するところは全く違います。同情とは、他の誰かが不幸にある時、その人に ^{あわれ} 憐み(かわいそうだ)の感情を持つことだと思います。一方、共感とは、幸不幸に関係なく、その人の持っている気持ちを理解し(わかる)、その気持ちを自分の中に受け入れることではないでしょうか。

詩人は、あんたの気持ちは「よく判る」と言っています。ただし、「涙が出るほどわかる」と付け加えています。

何が「わかる」のでしょうか。

キリンと人間は、そのあまりにかけ離れた目線の高さから、お互いに理解できない存在として、認識せざるを得ません。その心中を思い遣ることなど、不可能だと作者は言うのです。ただ、遠く離れた故郷アフリカを思い遣る姿が、そのどこかもの思わじげな視線とともに、作者には共感できたに違いありません。そして、涙が出るほどわかったのです。

詩人もまた、故郷を遠く離れ、^{はる} 遙かな世界を思い遣っているのかもしれませんが。あるいは、「生の悲しみ」というものでしょうか。生きていることの悲しみを、キリンと共感しているのかもしれませんが。……何故、遠く離れてしまったのだろうか、と。

人間と人間を結びつけるキーワードは、実は「共感」という言葉かもしれません。ある人の感情を、まるで我が事のように受け入れ、その人の身になって、その人とともに生きていく……そんな感情が、人々の間に静かに ^{しんとう} 浸透していければと思います。やがて、その静かな広がりが、人々や世界を幸福に導いていくのではないのでしょうか。